

グローバル・エイジング

ARRP世界的リーダーシップへの取り組み

ARRP ボランティア コンサルタント (ニューヨーク在住)

政策科学博士、社会福祉士

溝田 弘美

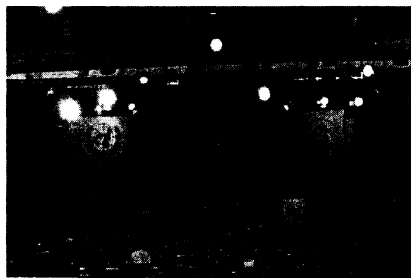
● 第二回高齢化に関する世界会議

二〇〇二年四月八〜一二日、スペインのマドリッドで高齢化問題を協議する国連の「第二回高齢化に関する世界会議」が開かれ、高齢化対策として、各国政府が優先的に取り組むべき一七項目の施策を盛り込んだ「国際行動計画」と「政治宣言」が採択された。二〇年に一回というペースで開催されるこの会議の第一回は、ウィーンで一九八二年に開催されたが、今回の国連会議の目的は、一九八二年にウィーンで採択された行動計画を現在のグローバルエイジングに適したものに発展させることとであった。国際行動計画の優先されるべき分野は「高齢者と社会経済的発展」「高齢化に伴う健康と福祉の増進」「高齢者を支える環境整備」。二一世紀は、先進国のみならず途上国も高齢化の問題に直面する。国連は途上国の貧困に取り組んできたが、貧困問題が解決しないまま人口変化の問題に直面することになる。このようなグローバル・エイジングの事態に対応して、今回の会議で、国際行動計画の第一実行責任は政府にあるが、政府―市民社会―民間セクター―高齢者のパートナーシップ、特

にNGOの重要な役割が強調された。

今回の国連会議で注目したのは、サイドイベントとして国連会議に先立って開催された世界NGOフォーラム(四月五〜九日)である。世界中から多数の高齢者NGOが集まり、ワークショップを開催し、国連会議に提言としてまとめた。世界NGOフォーラムに参加したNGOを含め、国連会議として出席した(政府関係者・NGO関係者・研究者)のは約四〇〇〇人。国連会議が政府・国連関係者と国連に登録したNGOしか出席できないのに対し、世界NGOフォーラムはNGOメンバーであれば誰でも参加可能であったため(一人あたり参加費一〇〇ユーロ)、参加者は当初の予想をはるかに上回った。日本からも世界NGOフォーラムへの参加は多く、「高齢社会NGO連携協議会」(約五〇の高齢者NPOで結成し、さわやか福祉財団理事長の堀田力氏が代表を務める)などのNGOが参加し、ワークショップを開催した。私はアメリカのNGOである「ARRP」として国連会議とフォーラムに参加したので、ARRPのグローバル・エイジングに対する取り組みについてレポートします。

(URL <http://www.geocities.com/hirofnim/>)



「第二回高齢化に関する世界会議」で発言するARRP会長(スクリーン)

西風東風

● AARPの国連会議及び世界NGOフォーラムに
かける意気込み

AARPのグローバル・エイジング戦略

今回、AARPの会長テス・カンジヤは、国連高齢化に関する国際会議に出席するアメリカ政府の派遣団のメンバーの一人。日本やイギリスが派遣団のメンバーにほとんど民間人を加えていない中、アメリカは民間セクター顧問として、メンバーの半分近くをNGOの代表者や大学教授にしている。アメリカでのNGOの社会的地位付けが他国と比較して高いことを象徴しているといえるが、AARP独自の戦略も、国内向けに加え、世界へ向けたものに広がりつつある。

二〇〇〇年新しくエグゼクティブ・ディレクターとなつたビル・ノベリは、就任にあたってAARPの目指すゴールとして「一、社会改革を担う」、「二、会員サービスのさらなる充実」、「三、グローバル・エイジングに向けたリーダーシップ」を掲げた。この中で最も斬新なゴールは、三番目のグローバル・エイジングにおけるリーダーシップである。これまでも、「国連高齢者年（一九九九年）」のイベントなど国際的に活躍してきたAARPであるが、どちらかといえばニューヨークの国連の枠の中で活動するNGOというイメージが強かった。しかし、すでに、AARPがグローバル・エイジングの分野におけるリーダーシップにふさわしいと思えるのは、三四〇〇万人の会員やボランティアの規模のみならず、エイジングに対する専門的リサーチ、アドボカシーを行う独立した

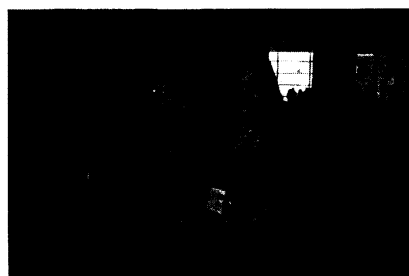
組織としての評価を得ているからである。そして、グローバル・エイジングのリーダーシップ戦略を本格的に開始したといえる活動が、今回のマドリッドで開催された国連の第二回高齢化に関する国際会議であり、世界NGOフォーラムである。

● マドリッドでのAARPの活動

会長テス・カンジヤ

マドリッドでの高齢化に関する国際会議と世界NGOフォーラムにAARPから多くのスタッフやボランティアが参加したが、その中で最もアクティブであったのは、テス・カンジヤ会長（二〇〇〇―二〇〇二年）である。会長はAARP独自のワークショップを司会進行役として開催し、他のワークショップにも数回パネリストとして招待された。彼女は会長就任前の副会長の時期には、AARPの全国立法協議会の執行委員といった役員を務めるほか、南カリフォルニア大学にあるエステル・パーシー・アンドラス老年学センター（AARPの創設者であるアンドラス博士が設立）の理事なども務めた。若い時は、ミシガン州高齢者局でエグゼクティブ・ディレクターを務め、ロビイストと高齢者のための政策提言に関するニュースレター編集を行った。彼女のこれらの高齢者政策の知識や行動力は、会長として行った議会公聴会での数々の証言などで、高い評価を受けているが、マドリッドでも十分発揮されたといえる。

また、テス・カンジヤ会長は、これまでのAARPの会長の歴任者の中で最も日本人に人気の高かった会長で



AARP会長テス・カンジヤ氏と筆者

ある。会長任期の二年の間だけでも、訪日四回を経験している。彼女は、高齢化に関する国際会議開催時、「パブリック・プライベート・パートナーシップ」をテーマにしたシンポジウムにゲストパネリストとして出席していた。このシンポジウムには出席者が少なかったため、私は一緒に出席していた日本の政府の人を、テス・カンジヤ会長に紹介しようとした。ところが、シンポジウム終了直後、スペインのテレビ局のレポーターたちが会長を取り囲んでインタビューづくめとなり、私たちはその間待たされるはめになるということもあった。

ワークシヨップ

AARPは、世界NGOフォーラムでは四つのワークシヨップ、高齢化に関する国際会議では一つのワークシヨップを主催した。テス・カンジヤ会長が進行司会を務めた「変化を担う女性」以外にAARPが扱ったテーマは、「メディア・政策・人口変化」、「高齢社会におけるアドボカシー」、「高齢者虐待」、「雇用における年齢差別」と、今後最も重要となるトピックばかりである。日本では介護保険などの制度があるため、虐待や女性の役割は議論されているが、メディア、アドボカシー、高齢者の雇用差別などは、まだまだ積極的な議論が社会的関心となっていない分野である。このなかで、メディアと雇用における年齢差別をテーマとしたワークシヨップの概要を追いつながらエイジングの問題について考えてみたい。

このワークシヨップで司会進行役を務めたリサ・デイ

ビスは、AARPコミュニケーションズ部長で、すらりとした黒人美人女性。彼女は、高齢化という人口変化の中で、メディアがどのように「エイジング」のイメージを描いているかを分析し発表した。高齢者の定着していたイメージとは、無力、だまされやすく、貧乏で自己中心的であったが、ベビーブーマー世代が高齢者を迎える昨今、パワフル、賢明、裕福で寛大となってきた。実際には、高齢者の固定したイメージは一樣ではなく、個人差が大きいことも明らかであるが、エイジングは否定的なものではなく、アクティブ・エイジングとして描かれるようになってきた。また、エイジングは黄金のビジネス市場でもあるため、ビジネス関係のメディアは、高齢者を健康で裕福なイメージとして取り扱う傾向がある。このこと自体は、新たなビジネスチャンスとしてシニアマーケットの可能性を広げていくというポジティブな影響をもたらししている。しかし、その反面、悪質な業者の餌食にされ、被害にあう高齢者が絶えないのも事実である。また、政策形成者にとっては、高齢者が貧困で弱いイメージが浸透していれば、より高齢者に政府プログラムを提供しやすいため、メディアの流すポジティブなイメージは、反対の効果をもたらす可能性もある。メディアの影響力が大きい現在、受け手である一般市民はメディアイメージに惑わされないようメディアリテラシーが必要であることをAARPは強調する。

アメリカで一九六七年に制定された『雇用における年

西風東風

「年齢差別撤廃法」は、AARPの強力なアドボカシー活動によって成立した法で、現在まで数回の改定を経て、世界に紹介するにふさわしい高齢者政策である。このワークショップの司会進行を務めたのは、AARP財団の法的アドボカシー部長であるウエイン・ムーア。最初に発表したパネリストは、AARP財団の上級弁護士ローリー・マケインで、現在の『雇用における年齢差別撤廃法』改訂版の執筆者の一人である。この法は、雇用において年齢による差別を禁止したばかりではなく、政府の平等機会委員会が違反した会社を訴訟に持ち込むこともできる画期的な法である。このワークショップでは、先進国の問題だけでなく、ゲストパネリストとして、グローバルに高齢者を救済するNGOである「ヘルプエイジ」からも途上国の高齢者雇用についての発表があった。途上国の場合、高齢者、特に高齢女性の雇用差別は、無給労働問題で正式労働者と認知されるまでの過程で深刻な問題となっている。いずれにしても、高齢化が急速に進むグローバル・エイジングの二一世紀では、高齢者の雇用は重要な課題の一つである。

●AARPと日本人の関係

世界NGOフォーラムのワークショップでAARPはど日本人をゲストスピーカーとして招待したNGOはないのではないだろうか。AARPはワークショップを四つ開催したが、そのうち三つのワークショップに日本人がゲストスピーカーとして出席した。最初のワークショップは、テス・カンジャ会長が司会進行を務めた「変化

を担う女性」をテーマとしたもので、東京家政大学教授で「高齢社会をよくする女性の会」代表の樋口恵子先生を招いた。さらに、「高齢社会におけるアドボカシー」のワークショップは、さわやか福祉財団理事長で高齢社会NGO連携協議会代表の堀田力氏、「高齢者虐待」のワークショップは新井誠筑波大学教授をゲストスピーカーとして招いた。アメリカ型とは全く違う日本型の事例が、それぞれ日本の専門家からAARPのワークショップで発表されたことは、グローバル・エイジングの観点からもフォーラムに与えたインパクトは大きい。

AARPの記録によれば、AARPのワシントンD.C.本部を訪問した団体では、日本からの訪問団が圧倒的に多く、年間約三〇団体三〇〇人以上が公式訪問をしている。これに個人訪問や支部の訪問を加えると相当な数になるが、このようなAARPと日本との交流は、エイジングというテーマを通して今回の世界NGOフォーラムで反映されているようである。

第二回高齢化に関する国際会議は、二一世紀の高齢化という国際的な課題に対する計画と、この会議のメインテーマである「すべての世代のための社会」という概念を構築していくことを最終目的として閉幕した。AARPは、雇用における年齢差別撤廃をはじめ、この概念に向けて活動してきたが、グローバル・エイジングの舞台でもこれまでの経験を活かす段階に入ってきたように思う。

AARP主催のワークショップで。会長(中央)と樋口恵子教授

